

会話形式で内省記事を書いてみるテスト

△登場人物▽

a ..筆者。頭おかしい人の別名義。

I ..とあるセンターの職員。

T ..とあるセンターの職員。

舞台中央にローテーブル、それを囲むように三つのパイプ椅子。

上手側の椅子は空席。下手側の椅子にa。

ローテーブルに緑茶のペットボトルが一本。

aの手には台本。

a、パラパラとページをめくったり考え込んだりしている。

TとI、上手奥から連れ立って登場。

Tの手にはカフェイン飲料、Iはミネラルウォーターのペットボトル。
二人とも小脇に台本を抱えている。

T、aに気がついて片手を上げる。

T「よ、久しぶり」

I「三年半ぶり、かな」

a「あ、あつ、ど、どうも。ご無沙汰してます」

a、椅子から腰を浮かせてへこへこと頭を下げる。

TとI、上手側の椅子に座り、ペットボトルをローテーブルに置く。

I、周囲をものめずらしそうに見回している。

I「というかP_{priv}では、初めまして……になるのかな？ 一応」

a「そうですね……。あちらからフォーマットだけ借りた二次的創作物という形にさせていただきます」

T「ややこしいな。何の二次創作なんだよ」

a「noteの」

T「何なんだそれは」

I 「あー、だとすると、僕らという存在のグレーさは継承されてることになるね」

T 「だな。むしろここだとタグつけてない分、厄介度が増してるまでである」

I 「ま、タグは義務ではないけど、今回も注意喚起はしておきますか、と。（第四の壁に顔を向け、毅然とした表情で）あー、前回と同様、僕らは既商業作品とは一切無関係ということで、そこそこよろしく。なのでタグもつけてません」

T 「つけられたらどうすんだよ。ここ、そういうシステムだよ」

I 「その時はその時で。システム権限で消せるし」

T 「まあ、だいぶ元の属性薄れてきたけどな、俺ら。ただの便利キャラになりつつある。（aに）てかこれ何」

a 「え」

T 「何なんこの茶番形式」

a 「あー。いやあ、その、前もやりましたよね」

I 「うん、やったけど、やったけどさ。わかってんのかなあこの痛々しさ全開フォーマット」

T 「いにしえの同人誌とかのあとがきで作者とキャラが延々フリートークするやつ」

I 「しかも脚本形式」

T 「嫌われる系要素役満なのわかってる？」

I 「前にも言ったけど、メアリー・スー一歩手前だよね」

読んでいた人間の何人かがブラウザをそっと閉じて去り始める。

その後も三々五々、読者が減っていく。

I 「ほら、貴重な読者がドン引きしてるよ。……ていうか嫌だなあこのセリフ。こういう痛々しいやり取りさせられるこっちの身にもなってくれ」

a 「うっ……。ほんとすいません。まあ、最悪ブラウザバックしてもらえばいいかなって……」

この時点で、ブラウザの前に残っているのは数名程度。

T 「なんか前回よりずいぶん面の皮厚くなってないかい」

I 「だね。無敵の人みたいになってきた。困ったもんだな。(第四の壁に向かって) あー、

いつでもブラウザバックしていただいて良いですよー。このあとどんどんひどくなるんで……戻るなら今のうちです」

a 「（第四の壁に向かって）ほんそれです、あの、これ、完全に自分用メモっていうかただの記録なんで。他人が読んでも全然面白くないんで」

T 「んなもん載せるなよ」

a 「ほら、そろそろ読んで居たたまれなくなってきたでしょう」

T 「何がほらだよ」

a 「どうぞ、あの。お出口あちらです」

残りの人間のほとんどもブラウザを閉じて去る。

現在、同接数、1。

I 「だいたい帰ったかな」

a 「ああ、良かった。（ペットボトルのお茶を飲み）閲覧数増えると心臓に悪いんですね」

T 「何考えてんだよ。こんな、せっかく増えたフォロワーに冷水を浴びせるみたいなもの載せやがって」

I 「まあ、期待してくれたフォロワーには本当に申し訳ないけど……これさ、わざとやってるよね？」

a 「ぐはっ」

I 「……やっぱりな。フォロワーが増えて、彼らの目が気になってしまっからこそ、言い

訳としてやってるんじゃないの？　こういうどうしようもないもの書く奴なんだって思わせて、期待値を下げるための」

a、図星という顔をして、黙ってうつむいている。

T「タチ悪いな」

I「だから自意識過剰なんだよなあ。まあ、いいよ。今回もつき合うよ。で、こういう風の吹き回しで？　バレたから言い訳的な？」

a「あ、その、違うんです。バレた云々とかは関係なくて、これは前からやろうとは思ってて。ほら、昔書いてた原稿です」

a、TATeEditorの下書きを二人に見せる。

T「ああ、当時はまだTATeEditorで書いてたんだっけ。……って、はあ！？」　2022年

1月？」

I 「最初にPixivに作品アップしたの9月だね？　まだ何も上げてない段階でこれ書いてたの!？」

T 「バカすぎる」

I 「内容もバカすぎるな……」

T 「まだaじゃないんだ」

a 「あの頃はまだ立ち位置はつきりしてなくて。……で、さすがに先に、作品仕上げることにしました」

I 「そりやそうだよ。しかしなんでまた。この厨二病フォーマットがそんなに書きたかつ

た？」

a 「それは……、前にこれやった時なんですけど、何ていうかな、その、ええと」

a、ペットボトルの緑茶を一口飲み、続ける。

a 「あの時、なんかものすごい恍惚感みたいなのを感じてしまいました」

IとT、呆れて顔を見合わせる。

T 「……こいつ大丈夫か」

I 「………確かにあの時は明らかにテンションヤバかったな」

a 「脳汁出まくるっていうのかな。とにかくなんか異様に楽しくて仕方なくて、それが忘

れられなくて。あの境地をどうしても、もう一度、味わいたくてですね」

T「（虚無の顔で）はあ」

a「……いや、そもそも、それ以前に、二次創作がかつては苦手だったっていう話から始めたいと思います」

T「なんだい、藪から棒に。……長くなりそうだな」

a「はい、長くなります。すいません。（居住まいを正して）ご存じと思いますが、自分は二次創作って全然今まで縁がなくて、というかむしろ苦手で避けてきたところがあって原作が個人の思い込みで好き勝手に改変されるのになんかもやめるとするか、キャラSSなんかはどうしてもコレジャナイ感を感じてしまってたか楽しくめなかったんです。特に他人が書くものは」

I 「ふうん、『他人が書くものは』ねえ……。ということは自分でやっぱり書いていた？」

a 「ぐはっ……。そんな、言葉尻を捉えないでください……。中二の頃、見よう見まねで数ページ。でも、自分でも何か違うなと思ってすぐにやめたので、書いたうちに入らないです」

I 「なるほど、自分で書いた二次創作にすら違和感を感じていたと」

a 「はい、今以上にスキル不足で思うように書けなかったのも大きいんですが、わりと原作至上主義だったのかもしれない。こういうことを言うと言語弊があるかもしれませんが、二次創作をちょっと馬鹿にしたところがありました。読みもしないのに。今考えると蒙昧無知すぎて恐ろしいですけど」

I 「まあ、二次創作って結構特殊な世界だからね。読まない人はほんとに読まないよ。で、それがまた一体どういう風の吹き回しで」

a 「ある劇場アニメ作品にハマっていろいろ情報を集めている時に、たまたまその二次創作作品に触れたんです。記憶が怪しいですが、たぶん、きっかけはs○○さんの作品だった気がします。普段だったらスルーするんですが、書き出しに惹かれてついページを開いてしまった」

T 「あ、こんな怪文書に名前書かれたら迷惑だろうから一応伏せといったわ。気休めだけ」

I 「……そして、圧倒されたと」

a 「はい。……なんだこれって思いました。こんな二次創作があるのかって。一種の考察でもあるんだけど、考察という形態が絶対に突破できない壁を超えている。圧倒的にロジカルで、なのに圧倒的にエモい。こんなやり方あるんだっていう。うまく言えないんですけど」

T 「お前もう少しミステリとか読んだ方がいいと思うよ」

a 「他にもイ○○○○さんとかさ○○○○さんの作品にもやられてました。どちらも地域考証をガチガチにされつつエモい話を書かれる方で。それからなんといってもサークル『か○○○○』さんの作品群です。もうこの人達、野○○○○先生のゴーストライターになれるだろうっていうくらい。特に井○○○○さんの作品にぶん殴られて。別の意味で、こんな二次創作があるのかって」

T 「だんだん伏字が機能しなくなってきたるが許せ」

a 「あれで、二次創作に対する固定観念が完全に崩れたんです。ただ、それでもまだ読む習慣はつきませんでしたし、書くほうはなおさら考えもしなかった。だけど、さっきも言いましたけど例の脚本形式の記事書いた時に変な恍惚感に出会ってしまった。こちらが考えもしなかった台詞をお二人が脳内でしゃべり出して、手はそれを自動筆記し始めて、え、なんだこれ、何この状態って」

T 「まあ、確かにあの時は作者が使い物にならなかったから、俺が勝手にしゃべってたような覚えはあるけど」

a 「地の文もないお気楽フォーマットだからってのもあるんですが、なんかちよつと……ものを書く楽しさというか、昔を思い出してしまつて」

T 「ああ、前にどっかに書いてた黒歴史のことか。ハロワで成仏したっていう」

a 「うっ、その話はやめてください。ともかくそのあたりから、ワンシーンが地の文の形でまるまる浮かぶようになって、それらを書き留めてプロットのネタ帳を作り始めたのが2020年の9月」

I 「あれ、意外と早かったね」

a 「映画公開一周年でたくさん二次創作が出てきて触発されたっていうのはあります」

I 「でも最初の作品は2022年の9月。……二年間、迷ってたわけだな」

a 「……はい。そうなりますね」

I 「そうか。……前回、君はすごく恐れていたよね、僕らにキャラ付けすることも、オリキャラを創造することも。まあ、だからこそ僕らが呼ばれたんだろうけど」

a 「そうです。公式のあの完成された世界を自分なんか勝手にどうこうするなんて、やっぱり、めっちゃくちやおこがましいことだと思ってるですね。作品世界に自分が干渉したら、もうそれは全然違う何かになってしまう。似て非なる物で」

I 「楽しかったとは言ってたけど、書いてる最中は実際かなり辛そうではあったよね」

a 「あつ、はい、楽しいのにめっちゃ辛くて、二つの感情の板挟みで、その後もずっとなんだったんだあれって思っていました。あの辛さの原因は、考察記事との相性の悪さも

大きかったです」

T 「今は？ 吹っ切れたの？」

a 「吹っ切りました。無理やり。最初の作品書いてる時とかは、あえてキャラ崩壊系の違和感ありまくりの作品を読んで『自分のはこれよりは原作に近いだろう』と勇気をもらうとか」

T 「ずいぶん失礼な奴だな」

I 「あと、多世界モノや並行世界モノが原作だと、if 作りやすいから便利ってのはあるでしょ」

a 「それはかなりあります。完全に“こういう世界もどっかにあるんだよ”的ロジックで自分を騙してますね。でもまだB世界とかはやっぱ怖くて直接書けないです」

T 「だからか。だからハロワネタはだいたい変な設定なのか」

a 「何かしようもないギャグに逃げがちですね……。ほぼ出オチで撃沈してます」

I 「作品世界そのまま書く勇気がないから別の世界の話にしがちってことか。情けないやつだな。だからオリ設定が必然的に多くなるわけだ」

a 「ですね。でもオリ設定もあればあれですごく怖いんですよ。……わかりますか、自分なんか造物主になって世界や誰かの人生を一から作ることの怖さ」

T 「一次創作なんてその塊だぞ」

a 「はい……。一次創作は永遠に憧れるんですが、あれはやっぱ自分には無理で。まあ、この話はあとでもう一度させてください」

T 「いいよしなくて」

I 「それにしても、最初は主人公の後輩を一瞬出すだけでもへっぴり腰だったのが、京大のクラスメイトあたりで開き直った感あったね」

a 「はい、E子さん回はかなり意識して自分の苦手だった部分に斬り込みました。ただ、名前をつける勇気はまだなくて、それですごく苦しいことやってますね。まあEさんも名前ないから釣り合いは取ったつもりですが」

I 「あ、E子さんって呼び方、普通、通じないからね。スピノフアニメの2話に出てくる猫好きの同級生、とでもしないとわからないし、そもそもあのスピノフを見ている人自体、すごく少ないから。まあここではEさんでいいけど」

T 「^{せんば}仙波は、あれ、仙波ファンから刺されるぞ」

a 「(うなだれて) すいません、仙波君ほんとすいません」

T 「だいたいさあ、作品で自分語りしすぎなんだよ」

I 「自己を投影したキャラしか書けないのは君の大きな欠点だね」

a 「それは自覚してます……。全員、完全に自分なんですよね、ああああ、めっちゃくちゃ恥ずかしくなってきた」

T 「ただ、まあ妙に神経が図太くはなってきた感じはするな。身勝手な造物主としての自覚ができてきたというか」

a 「それはあると思います。一種の割り切りと言いますか。でもそれまでは本当に怖くて———というか、書き始めた頃、オリ設定も怖かったんですが、ストーリーテリングという行為自体にもすごく暴力性を感じて、どうしたらいいんだろうと思ってたんです」

I 「読者あつてのストーリーだからね。本質的に、僕ら登場人物には自由意志なんてない」

a 「はい、創作者って神よりタチが悪いなと以前から思ってた。作劇のためなら何だってやる。読者を楽しませなければならぬという至上命題があるから、起こる出来事、登場人物の行為、すべてに作為が入る。最初の頃、それに気づいてすごく恐ろしくなったんです」

T 「作者のさじ加減一つで死んだりするってこと？」

a 「いや、それ以前の問題です。たとえば」

ピロン。

スマホの通知音が鳴る。

a 「最初に書いた作品だと、作中でこんな感じで通知が鳴るシーンがあるんです。でも、

このエピソードは何とか後半に盛り上がりを作らなくてはと思って、書きながら無理やりひねり出したものなんです」

I「確かに最初のプロットにはなかったよね。オチも何もなくて、さすがにこれじゃ小説の体をなしてないと思ったと」

T「でもそのひねり出したオチも、取って付けた感満載のひどいものだけだな」

a「そうなんです。作品世界内では、ここで通知音が鳴る必然性がない。なぜ鳴ったのか？ 自分がオチを作らなきゃと思ったから、が答えなんですよ。物語の始めと終わりで、主人公の心境になんかこうプラスの変化をもたらしたかったから。それが定石だから。そんな打算的な理由で、この世界では本来起こらなかったかもしれない事象が、あっさり起こってしまうんですよ。ねえ、なんなんですかこれ。ヤバすぎですよ」

I「はは、せめてもう少し上手く伏線でも張っておけば、必然性を作品世界の中に帰結す

ることもできたかもしれないけど、この頃はまだそんな余裕はなかったよね」

a 「はい、もうオチをひねり出すだけでもいいいい……。他にも例えば雨のシーンがあるんですが、これも何となく陰鬱な雰囲気を読者に与えたいなあという理由だけで雨が降るんですよ。自分で書いててなんですが、そんなことで雨が降っていいのかと衝撃を受けました」

雨が降ってくる。

三人、あわてて台本が濡れないように抱きかかえたり、体を丸めたりする。

I 「あつ、何してんのおい、やめて。雨やめて。ここ舞台。屋内だから」

雨がやむ。

T 「……何やってんだよ。でも、創作物ってそういうもんだよ」

a 「いや、雨ってそういう理由で降るもんじゃないでしょう。もっとこう気象条件がどうか、湿度がなんとかで雨雲ができて雨が降るのが普通じゃないですか。今の雨だって」

I 「君は誤解してるよ。作品内のすべての事象は、作者がそこに在れと命じたから起こる。それは雨が降る物理的メカニズムよりも強い。作者がそれを描いた瞬間、因果律を遡って雨を降らす気象条件が構築される。もしそこに作為や違和感を感じたとしたら、それは作者の技量が足りてないせいだよ」

a 「うーん……。確かにその、技量のなさがあるから余計にそう思えるのかもしれない。だから通知音のエピソードに取って付けたような感じがあるのかも。そもそも最初の作品は『ネタ帳の中で一番無難そうなもの』を選んだんですが、無難だから書きやすいかと思ったらそうでもなかったという。無難ってむしろ難しいんですね」

T 「そんな理由で選んだのかあれ」

I 「ふつう、最初の作品って、どうしても書きたい話があって衝動的に書いたってパターン

ン多いと思うんだけど、違うのか」

a 「そうですね……。何かを書きたいという衝動はありましたが、特にあのプロットというわけじゃなかった。むしろ、本当に書きたい内容を今書いてもうまく書ける気がしないから、まずは数こなしてスキルを磨こう、という気持ちで書いたのがあれです。最初だしあえてオーソドックスに主人公とかが出てくる感じで行こうかと」

T 「ずいぶん適当だな」

a 「えっと、その……。自分にとってこの活動は、一種の実験なんです」

I 「実験？ 何の？」

a 「目的は……三つありますね」

T 「そんなにあるんかい」

a 「一つ目は、二次創作が苦手な自分が、二次創作を書いてみたらどうなるだろうか、という実験。実は、今でもキャラSSとかはちょっと苦手意識があります。一方で、すごい二次創作を書く方々に出会って感銘を受けた。この現象は何だろう、と。二次創作の何が、自分に苦手意識を抱かせたり、感銘を覚えさせたりするのだろうか。自分で書いてみることで、何か見えてきたりしないだろうかという」

I 「まあ、何でもやってみて初めて見えてくる景色ってあるからね」

a 「二つ目は、考察では扱えない領域に踏み込んでみたらどうなるか。作品世界の考察って、本来は作品内の情報だけから導き出せるものであるべきだと常々思ってるんですよね。よく断定口調で、作品に書かれてないことを妄想してそれが答えであるかのように述べてる記事とかあるじゃないですか。面白いし、もちろん仮説として最大限に尊重はしたいんですけど、それってやっぱり数多の仮説の一つでしかない」

T 「あー、たとえばあの映画のラストがなぜあなってたかとか、あの手のやつな」

a 「はい。どうしても作品内に材料が足りなくて、仮定に仮定を重ねるしかない部分が出てくる。もうそれは、二次創作の範疇になってくる。あちらの名義では、語り得ないものとして沈黙するしかなかったそういう部分を、仮説であると認めたうえで、語れるプラットフォームがあっても良いかな、と思ったんです」

I 「確かにそれは考察とは別物だからね」

a 「最後は……創作の適性がまるでない人間が、どこまでやれるだろうっていう実験です」

I 「適性……。どっかに書いてあったトラウマの話か。小三の時の」

a 「ぐはっ……。さすがですね。ここでは詳しくは書かないですが、あの日、自分に創作は向いてないということを思い知らされて、ずっとそれを痛感しながら生きてきました。

その認識は今でも変わってません。自分にはオリジナルな何かを想像する能力が著しく欠けている。相変わらずオチは何も思いつかないし、頑張ってプロットを立ててみても面白さからはほど遠い」

T「もしかして、二年迷ってたってのは」

a「はい、一番の理由はこれです。迷ってたというよりは、諦めてた、が近いな。忙しいとかいろいろ理由を自分の中でつけてましたけど、やっぱり創作って自分がやれる気がなくて。特に自分の周辺は本当に卓越した字書きさんが多いので、ますます彼我の差を思い知らされてました。自分にやれるわけがない、と」

I「うん、それは前回からうすうす感じてたよ。……でだ。その諦観を打ち破るほどの何かが2022年にあった。そういうことだよね？」

a「はい。きっかけは……長〇〇〇先生でした。長〇〇先生の作品のパロディを冒頭だけ書いて、おふざけでスクショを載せたらまさかの長〇〇〇先生と編集の樋〇〇先生に見つかった

て、ぜひ公開してほしいと言われてしまいました」

T 「うわ、怖えー……」

I 「いや、さらっと言ってるけど、これマジで長〇〇先生と樋〇先生が寛大な方々だったからいいけどさ。著作権的なアレでいうとヤバイから。訴えられたら終了だから。いやほんとお二人には感謝しないとダメだよ」

a 「ですよね……。気をつけます。でもこの時、長〇〇先生がこんなツイートをなさったんです。『人生で初めて二次創作されそう。やったあ!』って」

T 「なんつーホラーだよ」

I 「心臓に悪いな。……でも、ああ。『やったあ!』……か。ありがたいな。とはいえあの時点では内容を知らないからこそ期待してくれていたのかもだけど」

a 「まあ一応その後『二次創作で良いかは定義によるか』ともツイートしておられて、自分もそれまではこれが二次創作っていう意識は全然なかったんです。小説じゃないし、ただのレポートだし。というかあっちでは一応そういうことにしてます。noteですし。……ただ」

a、ペットボトルのお茶を一口飲む。

a 「あ、これ、二次創作って捉えることもできるんだって、その時初めて思ったんです」

T 「……まあ、二次的著作物ではあるのかもな」

a 「二次創作なんてずっと無理だと思ってて、苦手意識もあったのに。なんだ、知らない間に書いてたってことじゃん。これが二次創作と言えるのなら、自分でも書けるってことじゃん。そう思ってしまった」

I 「うーん、まあ、なるほど」

a 「で、書き上げた原稿を長〇〇先生に見て頂いて、正式に許諾をもらって公開しました」

T 「ぎゃあ、さっきからほんとに恐ろしいことしてんな……。これだから自覚のないバカは。それ絶対他でやるなよ。絶対だぞ」

a 「一応あっちの名義では二次創作扱いにはしてないのですが、見方によってはあの名義で書いた最初で最後の二次創作、と言えるかもしれません。で、なんかいろいろ背中を押されて、ひとまずやってみようかと思って、こちらの名義でも一作書き上げて、映画公開三周年の日に公開しました」

I 「めちゃくちゃな経緯だなあ」

a 「書いてる途中でちょうど『夏トン』を見て、変なふうに刺さったってのはこのこと

だったりします」

T 「携帯の件？」

a 「はい、もちろんそれもあります。でも、ヒロインの心情も刺さってしまつて。何かを書いてた時だったからこそわかってしまうというか」

I 「あー、あれね。うん、まあ、こちら側へようこそ。つてことで」

a 「ちなみに映画公開二周年までは誰かしらが二次小説を当日発表しておられたので、戦々恐々としてたのですが、なぜか三周年は結果的に自分ひとりで、拍子抜けした記憶があります」

T 「同日に出てたら確実に打ちのめされてただろうから、それマジで運が良かったと思うわ」

I 「で、調子に乗って『僕愛君愛』の二次小説も書いたと」

a 「はい。しかも映画公開日なのに、小説のほうに準拠した、映画にないシーンで書くっていう」

T 「アホすぎだろ」

a 「しかも濃度有限って書いたら、その数時間後にs○○さんから濃度は非可算無限だったというアンサー作品が来て凹みまくるという」

T 「なんかその手のエピソード多いな」

I 「迎撃システムが毎度ピンポイントすぎる」

T 「しかも先方に多分迎撃の意味もアンサーの意味もないからな。お前が勝手に迎撃され

ただけで」

a 「映画公開直後ってこともあってPixivのブックマが10件越えていう恐ろしい数字叩き出したんですけど、あれ実際ほとんど読まれてないと思うんですよ。読了時間約20分って書いてるのに、アップして2分くらいで何件かブックマついて。絶対読んでないだらこいつって思ってから基本的にブックマ信用してないです。9割減くらいで換算してますね」

I 「相変わらず卑屈だなあ。まあ、実際『後で読む』的な意味でブックマする人も多いし。てかブックマークって、本来そういうことだしね」

a 「でも永遠に読まれないんですよ。ええ、知ってます。ていうか、自分の作品がラストまで読まれたケースって延べ数件くらいだと思ってます。9割方、途中で読むのやめてると思う。なのでオチに言及されると『最後まで読んでくれただと……』って、感謝と畏怖で情緒ぐちゃぐちゃになりますね」

T 「途中飽きてすっ飛ばしてオチだけ読んでのかもしれない」

a 「洒落にならない冗談やめてください。でも、確かにそうかもしれない……。きっとそうですねえ……」

I 「でもそのオチもね……。弱いんだよねえ。小三の時のトラウマは結局解消してない」

a 「ううっ……。未だにオチに毎回四苦八苦してます。さすがにもうあんな禁忌はおかしてないですけど。ま○先生みたいにオチから逆算して作れるようになりたい」

T 「出オチばっかだしな。プロット決めずに勢いだけで書くからそうなる」

a 「一応、反省はしてて、E子さんのあたりからそれなりにプロット事前に作るように、して、ます……。 (だんだん小声になっていく)」

T「ああ、あの読者騙したかっただけの話ね」

I「書き方が悪すぎて、読者が騙されたままになってたからねあれ。三人しかない貴重な読者の二人の誘導に失敗するって相当だと思うよ。ゆ○さんほどの、作品世界を深く理解しておられる方にきちんと伝わらないって、もう世界の誰にも伝わらないから猛省したほうがいい。s○○さんが○○トリックと受け取って下さって救われたけど、あれはたまたまめちやくちや訓練された読み手だったというだけだから」

a「うう……。四箇所くらい念押ししたつもりだったんですが……」

T「お前だってさ、人の作品読むとき、かなり流し読みしてるだろう？ 頭に残るのはせいぜい一、二割だよ。ましてお前の作品なんて誰も真剣に読むわけないから、あざといくらいにしないと伝わらない。大体細かすぎて伝わらないネタが多すぎるんだよお前は。乙○乙○先生のサインとか、E子さんの実家の飼猫とか」

I「大体、や○○さんまで不必要に悲しませてしまったよね。読者を騙すのはいいけど、

騙された読者の思考エミュレートが全然足りてない。人の心を想像できないのに心情描写ができるわけがない」

T 「珍しくグイグイ来るね。よほど目に余ったか」

I 「うん、あれはちよつとね。言っておきたかった。でもまあ、そのためにもプロットを立てるのは良いことだよ。結局、創作って読者に届いてなんぼなんだよね。バックグラウンドの違う他人に対するコミュニケーションの一種。会話と違ってユニラテラルだから、ハンドシェイクも誤り訂正もできない、一度限りの通信路。だからこそ、エラーをできるだけ排するための先人の知恵が、作劇のセオリーには詰まっている」

a 「ああ……、やっぱりそうですよね。意識したいと思います」

T 「や○○○さんも、毎回読者目線でわかりにくいところを教えてくれてるだろ」

a

a 「あれはめちゃくちゃありがたいです！ マジでああいうの通年大募集です」

T 「お前には手が届かない一次創作を見事にものにしてる人の意見だ。ダメ出ししてくれる友人は本当に貴重だ。大事にしたほうがいい」

a 「ですね……。おかげさまで痛感しました。シーン冒頭の5W1Hとか、登場・退場系、ひっくり返した後のたたみ方は要注意だなと」

I 「うん、そういうのがしっかりして初めて、○○トリックも機能するからね」

a 「だけど大体、事前にプロット作っても、書いてるといつの間にかキャラが、こっちの思ってもみない行動し始めるんですよね……。眼鏡君の言動とか完全に予想外で、『は？突然何してんだよお前』って思いながら書いてました」

I 「あー、君はどう見ても論理的思考ができないタイプだからね。ガチガチにプロット決めて書くのはたぶん向いてない。職業作家だったらそれじゃダメだけど、まあ趣味の活動

だから、好きにすればいい。それに、書いてる時にそれが——自分の思考の埒外にある何かが突然降ってくる瞬間が楽しいから、書いてるんだろ？」

a 「あ、はい、そうです……。何かワンフレーズとかアイディアがどこからともなく降ってきて、それまでじっくり来なかった作品内の論理展開や伏線が全部つながった（ような気がする）ときの、うおおおおおって感じが、ほんとに好きで。それを味わいたくて書いてるのは確かです」

T 「相変わらず行き当たりばったりなやり方してんなあ」

I 「だからというわけでもないけれど、肝心のストーリーが面白くないというのは致命的ではあるよね」

T 「それな。いくらテクニクを学んでも、話が壊滅的に薄っぺらいし、人間が書けてない」

a 「そうなんですよ……。だから『ミウ』の彼女には、なんだか勇気づけられて」

T 「勘違いするな。あれは、面白い話は思いつけないけど、文才とスキルは新人賞総なめレベルだからな。立ってる場所がかなり違う」

I 「まあ『ミウ』には遠く及ばないけど、複数の方から、文章力はそこそこあるとか読みやすいと言ってもらえたことはある。ありがたいことだよね」

T 「いやあ、どうだろ……。文章力あるかなあ、これ。難しい言い回し覚え立てのイキった中学生みたいな文章じゃん。自分に酔ってるだけの。T○○さんとかの文章からもっと学んだほうがいいよ」

I 「逆に言えば、話の面白さより読みやすさのほうが印象に残りやすいってことだ。本当に面白い作品に出会った時って、文章の巧緻なんて吹き飛んじゃうからね」

T 「読みやすい、イコール、するするっと読めて何も残らないってことでもある。引っか

かりを持たせるのもテクニクだし」

I 「言い回しも話の展開も、だいたいワンパターンなんだよねえ……。ガツンと頭を殴られたような、とか、手垢のついた言い回しが多すぎる」

a、ガツンと頭を殴られたような顔で聞いている。

T 「Novel Supporterで警告出るやつな」

I 「毎回誰かの声が震えてるよね」

T 「西野カナか」

I 「伏せなくていいのか」

T 「このくらいはまあいいだろ」

I 「草いきれ」とか」

a 「（口をパクパクさせながら）あ……。う……。それは黒歴史へのオマージュのようなものでして……」

T 「ああ、いいいいいよ、それ以上話さなくていい」

I 「だいたいどれも、誰かに何かを託そうとする話。で、それが何となく相手に伝わるって話。だよね」

a 「す、すいません……。今後書くやつもだいたいそれになると思います……」

T 「まあ、好きなんだろ？ いいいいいよ。またこれかと思うだろうけど」

a 「あうう、どうすればよいんでしよう」

I 「うーん、そうだなあ。文体や文章力、プロットの立て方とかは鍛えればある程度の上達は見込めるとは思う。実際、書き始めの頃よりはほんの少しマシにはなっているからね。でも、面白い話を思いつく能力、これはどうなんだろうな」

T 「これも鍛錬のしようはあるのかもしれないけど、恐らく一朝一夕でやれるものじゃない。死ぬ気で頑張る必要がある。そして、こいつはどうやら、何の努力もするつもりがない。ただ、己の適性のなさのせいにして逃げてるだけなんだよ」

I 「だね。どうすればよいんでしよう、なんて言ってる時点でダメだなこりゃ」

a 「……………」

I 「さっきも言ったけど、趣味でやってるんだからそれでいいとは思うよ。本人は一生、コンプレックスを感じながら生きていくだろうけど、読んでもらうことよりも書くことの

楽しさのほうに重きを置いているみたいだし。うっかり読んでしまった読者の方にはお気の毒と言うしかないけれど」

T「そうだな。まあ、なんだ。がんばれ」

I「逆に、自分の特色を伸ばすことを考えたらどうか」

a「自分の特色……。なんだろう。話が超絶つまらないとかプロットが意味不明とかクソ長いとか内省しかないとかキャラが立ってないとか原作破壊しがちだとか」

T「その話はもうしただろ」

I「大変ありがたいことに、何人かの方が、君の作品を評してくださっていると思う。それも、いずれも神字書きの方々だ。きっと良くも悪くも君の文章の特色を的確に拾い上げて下さっているはずだ」

a 「私のジャンル、なんでこんな綾城さんレベルの神がたくさんいるんでしょうか」

T 「それはほんとに謎なんだよな」

I 「そうだな……。どこから探すか」

a 「あの……」

a、スマホの写真フォルダをおずおずとIに差し出す。

IとT、スマホを覗き込み、のけぞる。

I 「うわっ、なにこれ!？」

T 「もらった感想全部スクショしてんの!? ……はあ、そういうところだよお前」

a 「う、す、すいません……。心が折れたときに見る用なんです……。」

T 「まあ、感想もらうこと自体、滅多にないか」

I 「どれどれ。（画面をスクロールする）……たとえばこれとか。〃ストイックで緻密な作風〃」

a 「ストイック……？ 緻密……？」

T 「うーん。確かにブクマゼロ、感想ゼロでも粛々とアップし続けるのはストイックかな。厚顔無恥とも言うが」

a 「ブクマゼロだと、1になったときの衝撃が半端ないんですよ。わかりますかねえ。当たり前のように二桁三桁稼いでる人には味わえない、あの絶頂感。99が100になるのとはわけが違う。0が1ですよ。感度∞倍」

I 「0で割るな」

T 「感度言うな」

I 「でもブックマ増えるのなんて年に一回くらいなんじゃないの？」

a 「そうなんです。なので閲覧数くらいしか見る楽しみがなくて。（コメくいてー顔で）……まあ、増やしてんのほぼ自分なんですけどね。普通は同じ人が見ると増えないんですが、こういう条件だと増えるのか、だいぶ把握できてきましたね」

I 「寂しいやつだなあ」

T 「どんだけ閲覧しまくってるんだよ」

a 「書いた直後は頻繁に見てるんですが、しばらくすると急速にどうでも良くなりますね。

賢者タイムみたいな」

T 「賢者タイム言うな」

I 「……話を戻そう。“緻密”は複数の方から言われてるね。」

a 「緻密……緻密って何……ちみつ……はちみつ……」

I 「語義は“きめが細かいこと”とある」

a 「きめが細かい……？ あんなガバガバな話が緻密……？ あ、画面に字がびっしり詰まってるってことか。まあ、そうだよな。目がチカチカしてくるもんな。なんか立体視と
かできそう」

T 「クソどうでもいい細かいこといちいち書きすぎってのはあるよな。重箱の隅みたいな

話をちまちま。こまけーよ！　つていう」

I 「確かに。でも今回はポジティブな意味で緻密という語を使って下さってるように思う。ちまちました細かい話も、うまく書けば持ち味にできるのかもしれない」

T 「ただ、本人の性格がかなりガバガバだからなあ。細かさを自力でコントロールできるかというとまた別問題で」

I 「うーん。難しいな。次。〃ヒートアップしそうな場面でも静かに抑えた筆致〃。ああ、さすがだな、鋭い。これ、明らかな欠点でもあって、それを的確に見抜いてしかもポジティブに言い換えて下さってる」

T 「ものは言いようだな。裏を返せば盛り上がりが全然ないってことで」

a 「うぐぐぐ、もっとヒートアップしたいんですよ。でもどうやったらいいのかわから

ないんです」

I 「仙波の話とかだと原作が陰鬱だから運良くはまった感はあるけど、普通はもう少し感情曲線のアップダウンは入れるよね」

T 「読みごたえがある」「ボリリュームがある」「渾身の」「力作」

a 「あ、はい、長いですからね……」

T 「もっと削る勇氣を持ってもらわないと。前回も二稿にしたときわざわざ初稿が惜しくて残したり、しょうもないことやってたけど。長いからいいってもんじゃないんだよ」

I 「大丈夫、gitには残っていつでも復活できるから、安心して消してくれていい」

I、gitのコミットログをaに見せる。

a、ほっとした様子でコミットログを眺める。

T「『考察』『理屈付けをしている』……ああ、これもだな。論文じゃないんだよエンタメを書けよっていうね」

I「いや、考察だとか謎解き、ミステリの解決編みたいなのはうまくやれば十分にエンタメになるはずなんだよ。だから、方向性としては全然あり。だけどねえ、君の場合完全にやり方間違ってるんだよね」

T「陰キャ主人公の内省好きなのはわかるけどさ、読みやすさってのはあるからね。『虐殺器官』とか、あんだだけ主人公うじうじ内省ばっかしてるのに面白いだろ？ 要は書き方の問題なんだよ」

I「だいたい、会話がなさすぎるんだな。……だけどなんかさ、会話書くの、怖がってない？」

a 「はい、会話怖いです！ めちゃくちゃ怖いです」

I 「まだキャラを動かすのに怖じ気づいてる？」

T 「未だにおっかなびっくりやってるよな」

a 「それもあります。でもそれ以前に……リアルでコミュ障すぎて、自然な会話が書けないんです!!」

T 「ああ……そっち」

a 「完全にコミュ障が考えたリアリティラインのない会話なんですよ。こんな会話するやついねえよって絶対思われてますよ……。世間の人ってどんな風に会話してるんでしょうか。なんかそういうコーパス不是吗。マックに行っても女子高生に会えなくて」

T 「会話苦手だからって地の文で内省ばかり数万字読まされる身にもなってみろ。ERR

ORとかミウとか、会話なさすぎてひたすら目が滑ったぞ」

I 「まあ、どちらも単独犯の物語だから、他人を絡めにくいのは確かだけど、それにしてもあれはもうちょっとやりようがあったんじゃないかな。君の周りの字書きさんの作品見てごらん。すごく上手くやってるから」

a 「ですよね……。なのでE子さんの話は会話に対する恐怖感を克服したいという目的があります」

I 「知ってた。会話かなり増えてたもんな。……じゃあここでちょっと音読してみようか」

a 「やめてください殺す気ですか」

T 「でもなんかまだ、芸風が変なんだよなあ」

a 「E子さんの話はあえて作者がどこまで頭おかしいことやれるかっていうチャレンジでもあったので……」

I 「だから意味不明の図とか入れてたのか。まあいいや。たとえば今のこの僕らの会話も、練習の一つではあるわけだよね」

a 「はい……。それもあります。完全にスベってますが」

I 「でも、無理やり会話を増やしてみても、何か違うんだよね。二次創作になりきれてない」

T 「さすがにこの会話は二次創作の練習にしたらずいだろう」

I 「それはそうなんだけどね。ただ、そもそもよく考えると、二次創作というものをわかってなさすぎ、というのはあるかもな。今までほとんど読んでこなかった結果、普通はどういう風を書くのかを全然わかってない。かなり商業作品を参考にしてるみたいけど、

一次創作と二次創作は、作り方も注意すべき点も、全然違うんだよね」

a 「ああー…、それはあると思います。ほぼ書き専だったので、わかってないかと」

I 「二次創作には二次創作のセオリーや作り方がある。もっと他の作品も読んだ方がいい気はするな」

T 「原作あつての二次創作だからな。原作への敬意が足りないし、原作との距離感もバグってる気がする。好き放題やっていいわけじゃないんだよ。もうそれ一次でやれよって感じの話も多いけど、かといって一次創作に踏み込む勇氣はないんだろ？」

a 「はい、一次は怖いですね……。世界からキャラから全部作り出せるほどの想像力も創造力も自分にはない。二次創作は確かに原作との関係性は気を遣いますけど、作品世界とキャラが用意されているというのは圧倒的にラクなんです。それにかえて、原作の制約の中でどこまで変な話を作れるか、原作の一部をどこまで違う文脈に組み込めるか、みた

いな楽しみ方ができる」

T 「そんなチャレンジするなよ。なんで変な話目指すんだよ」

a 「一次創作はあまりに自由度が高すぎる。虚空に放り出されても何をしたらよいのか途方に暮れてしまうし、作品世界をひねり出してみても、そこに絶対的な自信をどうしても持てない。こんな世界があつていい、と思えない」

I 「しかし二次創作なら、そのハードルはクリアできてしまうわけか」

a 「ただ……、やっぱり一次創作は憧れるんですけどね」

I 「まあ、最初は二次創作で練習していくのもありなんじゃないかな」

a 「はい。なので今はとにかく少しでもスキルアップを目指したいと思ってまして。質や

面白さよりも “とにかく仕上げる”、“数をこなす”ことを目標にしています」

T 「お前それ言い訳にしてるだろ」

I 「で、数こなしてみてもうだった。八本書いてみたところで」

a 「うーん、そうですね……。確かに毎回いろんな課題や問題点は見えてきますし、最初の作品よりは話の取り回しがしやすくなってきた感じはあります。だけど、どうも頭打ちっていうか、目に見えて上達するわけでもないですね。まあ、まだ数が足りてないのかもですけど」

I 「だろうなあ……。明確な問題意識を持つてるわけじゃなくて漫然と書いてるだけだから、しょうがないね。自分が悪い」

a 「あと、書きたいものと読みたいものが必ずしも一致してないってのはあります。自分が書いたものを読者として読めと言われると、なかなかきつい。自分ですらそうなので、

他人にとってはほぼ拷問なんじゃないかと……」

T「書いてる時の気持ち良さに全振りしてしまったところはあるよな」

a「一年くらい放置して読んでみると『あれ、意外と楽しいな』と思える部分もあるんですが、それは完全に自分の好きな要素を詰め込んだからであって、客観的な面白さではまったくないんですよね」

I「そうだなあ……。読みたいものが書けるようになってくると、少しは変わるのかもしれないねえ」

三人、ペットボトルの飲み物を一口飲んで、一息つく。

T「で、なんで別名義なの」

I 「お、攻めるねえ」

a 「う……。いくつか理由はあります。（周囲を気にしながら）……まず、わりとこれグレーな活動なのでっていう。ええと、その、お察しください」

I 「あー、なるほど」

a 「それと、作風があまりに異常だし不謹慎すぎる」

T 「それはそうだな」

a 「基本、ファンに殺されそうな話しか書いてないわけですよ。一条さんとか典型ですけど、わりとどれも原作への冒読じゃないですか。仮に許せるとしても、世の中の大半の原作ファンにとっては、かなり異端な、明らかな解釈違いなはずなんです」

I 「でもフォロワーさんは優しいから、あっちの名前で出ていると、きっと読んでくれよ

うとしてしまう、と。それは確かにまずいね」

a 「そして不幸な事故が起こる。フォロワーにそんな精神的ブラクラを味わわせたくないっていか。自分がかつて、二次創作が苦手だったからこそ、そう思うんです。原作を愛するがゆえに抱いてしまう違和感。あんなにバカにしていたのに、自分がそういうものを生み出す最たる存在になっていたなんて」

T 「じゃあそんな話書くなよって言いたくなるけど……無理なんだよな」

a 「はい……。無理ですね。みんなが読みたがるような作品を自分は書けない。いや、自分が読みたい作品すら書けない。そんなものにフォロワーの貴重な時間を割いてもらったら申し訳なさすぎる」

I 「それは確かに分離したほうがよいかもね」

a 「あとですね……。そもそもですよ、どちらくそ恥ずかしいじゃないですか!! 性癖ダ

ダ漏れなわけですよ。認知の歪みも人生経験の浅さも恋愛観のキモさも、全部露呈しちゃうわけで」

I 「まあ、確かにあれは恥ずかしいよな。痛々しいラブレターを公衆の面前で読まれるくらいなの」

a 「もう完全に全裸で河原町かわらまちの交差点に立って推しを叫ぶ気分ですよ」

T 「犯罪だよそりゃ」

I 「それじゃ、検索性が著しく低いと一部で盛り上がった名前については」

a 「あー、これはもう、完全に名前考えるのが面倒だっただけです。オリキャラの名前決められない問題と同根なんですけど、そもそも名乗るほどのものではありませんし、あとで何かいい名前思いついたら変えようと思って、思いついてないという。でもあっちの名義

も事情は同じですよ。適当につけたのは」

T 「ハーメルンでアンスコついでるのは何？」

a 「あれは単純にハーメルンが一文字の名前を受け付けなかっただけですね」

I 「えっと……。一応確認だけど、絶対に秘密ってわけじゃないんだよね？」

a 「はい、単にヘタレすぎて自分から言い出せないだけで、言及していただいてかまいません。ながやまこはるちゃん的な感じの立ち位置ってことで」

T 「いちいち覚えがおこがましすぎるんだよ」

a 「う、す、すいません。……じゃあ、お（略）はあいつで、俺はただのエキストラさ、的な——」

突然、ホリゾントの向こう側から別名義が飛び出して来る。

お「あれ、呼びました？」

T・I・a 「「ぎゃあ！」」

一同、椅子から立ち上がり、身構える。

a、逃げようとするが、Iに睨まれ、足を止める。

T「なっ……。なんでお前がここにいるんだよ」

お「（出囃子とともに）や、どうもどうも。みなさんお揃いで」

I「（二人を見比べて）……あー、こりゃ厄介なことになったな。（小声でTに）幕下ろす？ どうする？」

T「（小声で）ここで幕下ろしても観客が困惑するだろ」

a「で……出たな別名義！」

お「別名義はそっちだろ！」

T「（aに）おい、何てものを召喚してんだよ」

a「うっ、し、してないですよオ」

I「ああもう、これじゃここまでの僕らの苦労が完全に台無しじゃないか。まったく、どれだけこっちが」

a「そっ…、そうですよ！　だいたい、何勝手に人の正体バラしてんですか！」

お「そ、それはさあ……。てっきりとつくにバレてると思ったし……。みたいなー？」

a「こっちはただ恥ずかしい思いをさせられたか！ 自然にバレるならまだしも、
“自分からバラしたら向こうは気付いてなかった”なんて、最悪じゃないですか。もう恥
ずかしくて恥ずかしくて死にたいレベルでしたよ！」

お「ほ、ほんとは気付いてほしかったくせに！ 恋に恋するめんどくさい女子中学生
か！」

a「なっ……。なんだこの、じ……。じ……。自意識肥大大野郎！」

お「ろ……。ろ……。露出狂！」

a「マ……。マウント厄介オタク！」

お「り……李徴気取り！」

I「やめなさい」

T「だいたいどっから入ってきたんだよ。蚊かよ。ここは完全に閉じた空間のはずだぞ」

お「あー、あの向こうから、ですかね？（とホリゾントを指差す）」

T「なん……だと……。事象^{ホリゾント}の地平線を越えてきただと……」

I「うーん、バックドアは封じたはずなんだけどな……」

お「いや、縦書きHTMLとかPDFとかEPUBのURL見ればバレバレですよね」

T「誰も見ねーよ!! だから自意識過剰って言われるんだよ」

I「ともかくこれ以上ここにいられるとヤバいな。物理法則をバイオレートしてる。アド
レスの重複だ。下手するとこの存続が危うい」

T「あいつを元の世界に早く戻せ。(aに) おい、コンバータ作れるか」

a「ひっ!? む、無理ですよ」

I「あー、わかった。量子変換はこっちでやるから、逃げないように見張っというて」

お「人聞きが悪いなあ。逃げたりなんかしませんよ。この世界に長くいられないことくらい、知ってます。創作の世界は自分にとって、彼岸にほかならない」

a「……」

お「あんな、完全にスベッてて痛々しくて、長いだけでひたすら読みにくくて、創作の基礎が全然なくなってなくて、ファンに殺されそうな不謹慎な話を自分と結びつけられたら、

フオロワーに幻滅される。せっかく仲良くなったフオロワーに嫌われたくないんです。こんなお粗末な物しか書けないと思われたくない」

T「本音が出たな。でも、もうとつくに嫌われてるし、才能ないのもみんな知ってるよ。だからこれ以上、幻滅されようがない」

I「……○○さんの言葉を思い出しなよ。思った以上に他人は自分のことなんて見てない。しかもそれをラジオの人が言ったことにするなんて、小粋だよな」

a「（嬉しそうに）あっ……。もしかして、DJと懸けてくれたのかな……？」

T「ねーよ。だからお前らそういうところが自意識過剰なんだよ」

I「まあ僕らもちよっと悪ノリしすぎたところはある。……痛々しい発言にあんな温かいリプをくれるフオロワーたちのことを、君はもつと信じたほうがいい」

お「そう……ですね。うん。そうだな」

I「カミングアウトしてみて、どうだった？」

お「皆……、優しかったです。内心ドン引きして幻滅してるかもだし、義理かもしれないけど、本当に優しかった」

I「……あのさ、ほんとに話聞いてた？ 謙遜と卑下は違うし、君の態度はフォロワーにも失礼だ。仮にすべてがお世辞だったとしても、君のことを思っそう言ってくれてる。それを素直に受け取らないのは、彼らのそんな心遣いすら無下にしてることになる」

お「はい……。それはほんとに、そのとおりですね。自分にはもったいないくらいのフォロワーたちです」

T「名前を出さずにどこまで評価されるか、なんて変な逆張りも大概にしておけよ。お前のそのちっぽけな自尊心を満たすより、一人でも多くの人にフィードバックをもらうほう

が、きつと上達への近道だ」

お「そうですね、なんていうか……。そのくだらない自尊心はもう、満たされました。『こういう話をいつか書けるようになりたい』とずっと憧れていた方が、自分の書いたものを偶然読んでくれた。あろうことか『こういう話を書きたかった』とまで言ってくれた。しかも自分のことを知らない状態で、純粋に作品そのものを評してもらえた——なんかもういつ死んでもいいなと思いました。一生分の運を使い果たしましたし、これ以上の榮譽はもう望むべくもないなと」

a「だからってその勢いで自ら身バレするのは完全にバカの所業すぎるだろ。……その愚行のおかげで、もうそんな純粋な評価は二度と見込めなくなっただけですね。どうしてくれるんですか」

お「それでかまわない。もう変に逆張りはいしにします。ただ、やっぱり恥ずかしさは消えないですね。どうしても自分の名前でやる勇気が出ない。なので今後も基本的に

羞恥プレイはaさんに託します」

a 「あのね、人のことをなんだと思ってるんですか」

お 「エイリアス的なアレですね」

a 「この……そうやってめんどくさいこと全部押し付けやがって」

お 「逆だろ！ そっちがやりたい放題できるのは検索性の異様な低さに守られてるからだ！ こっち側と紐付いたら途端に筆が止まるくせに」

a 「そっちこそ、作品IDでこっそりエゴサしてるの知ってたよ！」

お 「う、うるさい！ こっちがバラすまで、s○○さんのツイート二件しかヒットしなかったんだ！（ありがとうございます！）感謝しろ！」

I「いやそれ感謝する相手違うから。作品の紹介ツイートして下さった方々に感謝すべきだから。s○○さんだけじゃない、r○○さん、T○○さん、ゆ○○さん、や○○さん、な○○○○さんとかね。（観客席の方を向いて）そういうわけでして……、ありがとうございます。（観客席に一礼し、向き直って）エゴサするくらいなら自分で朝晩宣伝ツイートすればいいのに。そうやって人のやさしさにつけこんだ他力本願は本当に良くない」

お「う……。それは……。正論すぎて言葉もございません……」

I「まあ、焦る必要はないし、たとえば無言ツイートとかならアリじゃない？ 自作とも他人の紹介とも言わずにさ」

I、コンバータを作り終えて立ち上がる。

I「……さてと、コンバータ、準備完了だ。そろそろ帰ってもらわないと、君自身も危ない」

お「（コンバータを覗き込んで）わ、すごい、これをくぐれば帰れるんですかね？」

a「ツイ廃はツイッターに帰れ！」

T「お前こそ早く原稿の続きやれ。数本溜めてんだろ」

a「あっはい……」

お「まどはまどにすぎない……」

T「お前もうるせえんだよ早く帰ってnote書け。ツイッター開くな」

お「（コンバータをくぐりながら）じゃ、ありがとうございました！ また来ます！」

T「来なくていいよ、てか来るな」

お「(コンバータの奥からaに向かって) 幸せになってみなよバーカ!」

a 「バーカ!」

二人、大きく手を振り合う。

T 「なんでお前らそんなに仲いいんだよ」

コンバータ、消える。

I 「……ふう、やっと静かになった」

T 「なったけど……っておい、a どこ行った」

ローテーブルの上にペットボトルと台本だけが残されている。

I 「どさくさに紛れてコンバートくぐったのかもな」

T 「あのバカ、台本まで置いていきやがった。どうすんだよ」

I 「どうせ追い出されてすぐ戻ってくるだろ」

T 「それもそうか。……てか、こっちはどう締めるんだよこれ」

T、VScodeの画面左下に目をやる。

T 「……2万字!? ほんとにしようもないな今回も」

I 「また上のレイヤーでクラッパード鳴らす?」

T 「さすがに今回はもういいだろ」

I 「だからオチが弱いってあれほど……。もう誰も読んでないだろうし、このまましれっと締めるか」

T 「それもそうだな。……じゃ、右揃えで（了）って打っちゃっていい？」

I 「うん、よろしくー。いつものことだけど、右揃えはハーメルンとPDF・EPUBだね。Pixivはできないかr……。いや、待て。ちょっと待て。（了）打たないで」

T 「え？」

I 「見ろ。同接数」

同接数、1と表示されている。

T 「（困惑して）ええ……。？　もしかして、まだ!？」

I 「ああ、たった今、まだこれを読んでる人がいるんだよ」

T 「マジかあ……。奇特な人がいるもんだ」

I 「さすがに途中はスルーしただろうけどね」

T 「スパチャでももらうか」

I 「あいにくそんなシステムはないし、一応、いつものを貼っておくか」

ブルマ／すき、いいねくださった方、ありがとうございます！　うれしいです。

I 「これでよし……と」

T 「嫌な圧だな」

I 「大丈夫。ほら、意地でもブックマしてやるかって思ってるよ、読み手は」

T 「でもさ、過去にブックマもらってんだよ。信じられないけど」

I 「まさか」

T 「マジだって」

I、ブックマ数を確認する。

I 「……ほんとだ。もしかしたらaは、お情けとしか思えない呪いにかかってしまってる
かもだけど、僕らはありがたく受け取っておこう」

二人、ブックマに手を合わせて拝む。

T 「で、どうするよ。これじゃ、締めらんねーじゃん」

I 「しばらく待つか。こちらがしゃべらなければ帰るだろう」

T 「……」

I 「……」

T 「……」

I 「……」

T 「……」

I 「……」

I	T	I	T	I	T	I	T
⌈ ⋮ ⌋	⌈ ⋮ ⌋	⌈ ⋮ ⌋	⌈ ⋮ ⌋	⌈ ⋮ ⌋	⌈ ⋮ ⌋	⌈ ⋮ ⌋	⌈ ⋮ ⌋

T 「……………おい、まだいるよ」

I 「参ったなあ。こつちも通常業務に戻りたいんだよね。この茶番は完全にボランティアだし」

T 「(第四の壁に向かって) おーい」

沈黙。

T 「……………寝落ちしてんじゃね？」

I 「返事が来たらヤバイだろ。ユニラテラルなんだってば」

T 「そうかー」

I 「……………」

T 「……………」

I 「……………」

T 「……………もういい！俺は締める！一言断って締めればいいだろ！」

I 「あー……。まあ、それしかないか。気持ち悪いけどしょうがない。（第四の壁に向かって）えっと、締めますよー」

T 「Linuxのシャットダウンメッセージでも流しておけばいいよ」

I 「いや、それはやめた方が良くと思う。こっちから干渉して、乗っ取ったと思われても厄介だし。（第四の壁に向かって）じゃ、ほんとに締めまーす」

T、最終行に（了）の一字を書き入れ、右揃えにする。

（了）

——暗転。

——現在表示されているであろう同接数、そして二人の反応について、あなたはもはや、知る術がない。